

鎧の權三重帷子

近松門左衛門作

ハルギンフン君八千代國は。治まる御留守にも。
弓馬嗜む梓弓オクリ馬の。庭乗り遠乗りと。

遙かに出でし。フシ濱の宮。鳥居通の流鏑馬

馬場。竝木に落つる風の音とどろ。くくと

フシ打つ波も。地乗分けつべき器量こそ。表

小姓の數々の中にも笹の權三とて。武藝の

響世の人に。鎧の權三は伊達者のどうでも

權三は好い男。諺ひはやらすフシ美男草。

地女若二つの戀草を飼ひに飼うたる月毛の

駒。前臑取つて驥強く。ギン雪嚙み砕く白ゾ

に。三臑よしや尾は青柳の。しつたりした

りしたくく。かつしくと。フシ歩ます

る。大坪流の鞍の内。稽古に心染手綱かい

くりかいくり乗り拍子。はいとかけたる一

聲に。兩口放す奴が髭も。共にはねたる駭

足や下ギン袴の裾に風受けて小波寄する須彌

の髪しつくと。乗戻し引廻し乗る。

袖指の。フシ松も女松の十八公。其の年頃の

振袖の京染模様背笠は。フシハヅゝ家中で誰

の娘ぞや。地お乳母らしいが小風呂敷。權

三見る目の絲薄ちらりほらりと馬の先よけ

る。振して邪魔をする。權三それぞと見し

人の。フシ心に覚えあら駒も。色にそばへ

て足早き。はいく聲をかごとにて。馬ぞ

迷惑痴話の鞭打ちくれ。く駈けさする。

フリ響の音ははりりんく。泥障の音はは

たくく。叩く嵐やナホス馬場先のハツミ篠

の。笹原さらく。さらくさつと乗

飛び。くく。フシ乗飛ばせ。蹄を陸地に

着けばこそ。二町五反の馬場の内。息をも

つがず半時ばかり達者を見せてぞ三風せ

め馬の。フシ鞍も鎧も。地汗になり乗り止む

れば小者馬取。もうお仕舞かと走り寄る。

地ヤイ丁稚。殊の外汗に成つた。一走歸つ

て着換の袴持つて来い。地馬取ども其の間

宮へ行って休息せい。ないといふより中間ど

も休む方には。フシ足早く。地立去る跡につ

るくと立寄つて足の爪先。鎧共に確と取

り。地久しうござんす權三様。御無事で目

出たう御座んする。これ見ぬ顔もよい加減

にしたがよいぞや。可愛そに馬も骨折らせ。

今日一時に稽古せねば叶はぬか。さ程私が

いやならば最前から避けずとも。なぜ此の

馬に踏殺させて下さんせぬ。エ、こな様は

なう侍のぬけくと。地よう嘘を吐かしや

んすと。睨む目の中おろくと。フシ女は涙

脆かりし。地これお雪殿。人にこそよれ川

側伴之丞殿の妹御。君傾城を翻るやうに權

三が嘘を吐くものか。少しも心變らねども

下々の奴等撤かうため。地中間め等が見付

けうかと馬に乗る心もせず。氣が宙を飛ぶ

やうでこれ此の如く汗かいた。地地體乳母

お主が不調法。屋敷の人目もあるもの。若い女中に意見もせず此のやうな遠駈け。御家中ふつと名が立つては。此の權三御奉公がならぬ。申し交した詞は違へぬ。サア同道してお歸りやれ早うくと乗出す。響取つて引留め。乳母が不調法とはよい手な事仰しやれなやいの。權三様。よもや忘れはなされまい。去年の冬私が宿で。お雪様とお前と逢はせた時。是限りと仰しやれたか。サアなんと。たつた一夜限に切賣する娘御ちやござらぬアウ忝くも。それから梨も碌もせず。お文の行く度毎に此方から返事せう。どれどこに一度の返事もなされたか。お雪様の父御様母御様は御座らず。目代になる此の乳母はぐるなり。伴之丞様へたつた一言。言入れてつい御祝言済む事。サア奥様に持たしやるか。但しいやか。いやならいやと今御意なされ思案がある。ほんに私が育てて自慢ぢやないが。男に指もさゝせぬ。甘い盛り十八角豆。乗

かな内を一口食うてせゝりさがして置かうや。そりや成りませぬア、あべかこうどぞ喚きける。ア、女中の氣では恨み尤。文は落ち散る遠慮深く。返事せぬは身が誤り。御舎兄之丞とは。御膳番の淺香市之進に茶の湯の相弟子。心易い朋友なれども申し悪いが味な氣質で。むさと物の言はれぬ仁。若い者の口から御自分の妹下されとは何ともそれは恥かしし。然るべき媒頼み兩方へ挨拶あれ。我等は合點伴之丞さへ呑込まれるれば。用人衆迄伺うて其の上は縁次第。此の詞を遠へなばたつた今此の馬から。眞逆様にころりと落ち。踏殺さるゝ法もあれ。心底變らぬくと言へばお雪がにつこりと。笑顔に開く小風呂敷。これ此の帯の縫見て下さんせ。丸に三つ引お前の御紋。私は裏菊能うはなけれど私が細工。大小の縮まるため中入れに念は入れたれど。新口がお氣に入るまい。フシさり乍ら。地末長う縫ひ仕立て召させねばならぬ。ど

れぞ媒頼みて本式の言入れはお前から。是は先づそれ迄の心頼み。此の帯の如くつ迄も。お腰元を離れず添ひ纏うてやさうぢやぞやと。鞍の前輪に打懸くる其の手を取つてちつと締め。どうも言はれぬ嬉しい心。八幡我等も心底變らぬ。此の馬も聞いてゐる畜生の心は人よりも恥かしい。こりや證據に立て馬よ聞いたか々と。いへどもいかな馬の耳。風に嘶くばかりなり。權三帯疊んで懐に押入れ。あれく演手から栗毛馬の遠乗は。舎兄伴之丞。ハアほんに乳母兄様がそれ其處へ。ヤア且那樣かこりやならぬ。見付けられては後の邪魔。サア先づ此方へとオキ本社の方へぞ走りける。程なく伴之丞乗來り。ヤ權三お身も遠乗か。いかう精が出て馬持がよい故に。其の月毛も一兩年めつきりと良くなつた。買手があらば賣つて仕舞ひ五兩も七兩も利を取つて。又跡から安馬買置き乗入れて賣つたらば。金持に成る筈。地

よい藝覚えて仕合と人をけなす口癖。權三氣立を能く知つて。馬ヲ、サ小身者の馬の手入飼をろくに飼はぬ故。見かけばかりで爰はの時の用に立たぬ。御身達は大人手は多し飼は良し。すはといふ時驛強く歩み勝つはお身の馬。秘藏めされと言ひければ。ム、其の言分は先度二の丸櫻の馬場で。其の月毛に此の馬が歩み負けた當言な。一馬場せめて勝負せう。サア乗れ〜と氣をせいたり。イヤサ心得たと言ひ度いが今迄乗つてお見やる通り。人馬共に草臥只今歸宅。地重ねて〜小者ども来いやいと。言へどもいつかな聞入れず。イヤ草臥とは負け用心。勝負せねば堪忍せぬと。手綱を練つて乗り出す權三も今は力なく。馬には一息つがせたり我が身の汗も入り方の。月毛の駒に櫻狩祕密の手綱繰り控へ。繰り繰り緩め左右に輪をかけ違へ。互に負けじとナホス二三遍入れかへ〜乗つたりしが。權三が馬は逸物の口を切つて角を

入れ。ハウツとかけたる聲の内一散に駈出す。伴之丞が栗毛馬鞭影に尻込して。打つても引いてもしやくつても前臈かいて高嘶きし。躍上り跳上り鞍に堪らず伴之丞。屏風返しにどうと落ち。木の根に腰骨打當てあいた〜といふ聲に。馬取中間草履取主人の恥も打忘れ。フシ一度にとつとぞ笑ひける。權三驚き飛んで下り怪我は無いかと立寄れば。馬こりや權三相手はお主が月毛馬。此方へ渡せ切つて棄つる。馬を渡せあいた〜。腰を揉め中間ども。うぬ等も首が危いと。權三が方を尻目かけ相手知れずの一人腹。權三もいはれぬ挨拶と身を控へて立つたる所に。進物番の岩木忠太兵衛。六十八でも生得堅き銅月代刺り立てて。ヤ御兩人是にか。御宅へも参るべきによい所で御意得た。東御家老衆より御狀到來。此の度若殿御祝言相濟みお悦び。お國に於て當月下旬近國の御一門方御振舞。御馳走のため眞の臺子の茶の湯なさるべし

との事。是によつて我等が智淺香市之進も留守なれば。御家中弟子衆の中眞の臺子傳授の方へ。御廣間本式の飾物等勤めさせ申せと。御留守御家老衆より仰付けらるゝとは申せども。誰方が傳授なされたも存ぜぬ故御尋ね申す。此の度の御用に立てば第一は御奉公。其の身の手柄智の市之進も本望。何と御兩人聞覚えもあつて茶の湯の名を取らうならフシ此の度なりとぞ語りける。我慢者の伴之丞。ハア、眞の臺子易い事。傳授許しは受けねども。祕事は臆何でもない事。地色々我等存じて居る。數年の稽古は此の度御用は拙者承る。心易う思召せ。それは先づ珍重權三殿は御存じないか。されば存じたと申されず存ぜぬとも申されぬ。總じて是は茶の湯の極意。家々の傳多けれども師匠市之進一流は。東山殿より嫡傳。一子相傳の大事なれば。權三體が茶の湯で傳授許し受けう筈も御座らねども。師匠の咄聞きはつた儀もあり。大

概非の入らぬ程の御用の間には合せませうと。詞の中より伴之丞。ハテ新程大事の晴の御用。間に合せて済む物か。此の御用は伴之丞が一人して勤むる。忠太殿其の通り心得召されと言ひければ。いや我一人のまゝにもならず。娘ながらも市之進女房彼が所存もあるべき事。假初ならぬ眞の臺子の傳授事。誤り有つては殿の恥諸事談合づくがよい筈。サア御兩人御歸りか。ざ御同道致さうか。兎も角もと伴之丞致しが腰を引く。忠太兵衛面憎く。此方は腰をお引きなさるゝが疝氣でも起つたか。されば拙者程の馬の名人なれども。龍の駒にもけつまづき。馬から落ちて落馬致したと。地片言やら重言やら忠太兵衛可笑しさ。彼奴翫つてやらんと思ひ。馬から落ちて落馬したとはいかう念が入つた落馬。痛むが道理何方も落馬が流行やら。生駒新五左が癪も。妙薬一服でかけもさす落馬致す。我等は今朝他所へ参り。大事の

精進をつひ落馬致した。此の様に落馬の流行する時。むさといひ分などなさるゝな。首が落馬致さうぞと。灘口いふも茶の湯者を壁に。持つたる三身への習ひ。昨日は今日の。初昔世の口に合ふ茶の名所。人は氏より育ちかや。浅香市之進の留守の宿。おさるは流石茶人の妻。物數寄もよく氣も伊達に三人の子の親でも。華奢骨細の生れ付き風しのばしくゆかしくの。三十七とは見えざりし。地數寄屋廻りの掃き拭ひ下女中間にもいろはせず。箒放さぬ掃籠すき路次の飛石敷松葉。石燈籠は苔蒸して。巖となる手水鉢植込の。クキ木の下蔭の落葉かくなる迄夫婦存らへて。子供のを末を高砂の。松のナホス榮えや。祈るらん。中息子虎次郎棹竹横たへ。年季の角介杖提げ路次の中に走り入り。景清是を見て。物々しやと夕日影に。打物閃かいて切つて懸れば。怖へずして。双向いたる兵は四方へばつとぞ逃げにけるゑいやつとう。

とぞ打合ひける。ヤイ〜とぞ打合ひける。餘程にあがけよ其處なぬく奴。見事男の數に入りながら江戸の供さへ得仕をらす。少い子を相手にして。怪我でもさするか數寄屋の壁に。疵でも付いたら何とする。これ虎次郎。あの馬鹿を相手にして日がな一日悪あがき。一々に帳に付け父様お歸りなされたら。地きつと告げる待つてゐや。叱られていや母様。悪あがきはしませぬ。私は侍ぢや槍遣ひ習ひます。これなう。其方ももう十ぢや。其の合點が行かぬか。侍は侍知れた事。さり乍ら父様を見やいの。御前もよく御加増迄下された。武藝は侍の役珍しからぬ。茶の湯を上手になさるゝ故。人の用ひ奔走もある。少い時から茶杓の持ちやう。茶巾さばきも習うて置きや。長々の留守の中。子供が悪う育つたと言はれては。母が浮名も恥かしい男の子は男の手。祖父様へ行て大學でも讀み習や。馬鹿よ。供して暮方に連れて戻れと。内外迄に氣を

配る。留守こそ、心つくしなれ。お菊はさすが姉だけの。母様いかにお世話。些お休みと差出す。薄茶茶碗の音羽山おとなくれたる振を見て。ア、孝行なようにやつた。おとなしう成りやつた。妹のおすては乳母と遊びに出たさうな。行水も仕舞うてか此の髪は誰が結うた。まんが細工と見えたの。鬘がまちつと下つた額もけんで愛想が無い。巻の出しやう髪付で能うも悪うも見せるもの。顔の道具相應に眉が女子の大事の物。前髪もかうではない母が直してやりましょと。開く櫛箱鏡臺の。此の鏡より世の中は、人こそ人の鑑なれ。人の振見て我が振の。善きも悪しきも身の手本。繪に書く筆のすさみには。京や大阪の上臈も。心で見れば今爰に。吉野。初瀬の。花も見る。江戸殿御持つての朝寝髪。湯上り顔や洗ひ髪。人にな見せを亂れ髪。寝亂髪の枕にも。寝顔は猶も、慎しや。容儀は生れ付なれば只嗜みは黒髪の。め

でたからんこそ。女はめやすかるべしと徒然草にもあるといの。鬼角女子は髪かたち千筋と撫づる櫛の齒に。身持行儀の解きほどき子を思ふ手につや／＼と。見かはす程に見えければ。格別よい子になりやつた嘘ならその鏡見や。親の目は最良目他人が證據まん来いよ。飯炊きの杉もちやつと来て。お菊が髪つき見てくれない。あい／＼と走り出で是は／＼。奥様いかいお上手額つき髪つきで。下地のよいお顔が猶美しうならしやんして。女子でさへ辛氣が湧く裸身をむつくりと。抱いて寝たいと褒むるもあり杉がはたと手を打つて。ア、さうぢや。日頃の不審が今暗れた。私が鏡で顔を見て木地は随分よけれど。人が惚れぬ異なる事と思うたが。髪の結ひやうばつかりであつたら此の身が埋木ぢや。慮外ながら奥様の手に二三日かゝつたら。お國中の男は秋風に薄の穂。靡けてやろとぞざゝめきける。親の子を褒

むるはいやらしけれど。此のやうな娘を大抵の男に添はせるは妬ましい。常々づく思ふには。御家中にて智を取らば。表小姓の笹野權三様に添はせたい。器量はお國一番武藝ようて茶の道も。弟子衆に續くはない。地そして氣立といふものが萬人にも憎まれぬ。いとらしい氣質。男の生粹生粹といへばお菊は童氣の。申しかゝ様。權三様は大人で叔父様のやうにあらう。地わしや、しや／＼と頭振る。ア、わけない母は三十七の西。父様は一巡上の西で四十九。これ十二違うても美事我が身達のやうな子を持つた。權三様は一巡り下の西で二十五。其方は西で十三。十二の違ひは恰度よい似合ひ頃。まあ二三年して顔も直し脇つめたらしつくりの長門印籠。ほんに四人西の年是も不思議。榮耀言はずと殿御に持ちや。其方がいやなら母が男に持つぞや。ほんに市之進殿といふ男持たねば。人手に渡す權三様ぢやないわいのと。

子を寵愛の間立無く。時の座興の深戯も過去のフシ悪世の縁ならぬ。サア此の上に衣裳着せ變へ襦袢させて見せうぞと。娘自慢の鼻脂オシロイ手を引き奥にぞフシ入りにける。玄關に物まう。茶の間のまんがど

れいと應へ出迎へば。笹野權三樽持たせ。岩木忠太兵衛殿は是に御座らぬか。ア、

毎日御見舞なされるれど今日はまだ見えませぬ。ム、然らば奥様へ申しくりやれ。此

の中は御無沙汰。御留守何事なく珍重に存じます。ちと申したき事御座れども。委

細は忠太殿迄申し入れませう。此の一樽は上方の名酒。幼い方のお慰お見舞の印と。

お席に申してくりやれと。言ひ置き歸ればア、申し先づ暫くと走り入る。女房はや

立聞いて。御口上聞いた。待受けたやうな事苦しうない。お通りなされと申しま

せと。櫛笥鏡臺片付けて塵掃く羽根の二つ羽も。比翼の悪縁底深き。笹の權三は遠慮

ながら、常の居間にぞ通りける。是はよ

うこそお見舞と申し子供方へとお心つき。珍しい御持參折々玄關迄お出で下されても。態とお目にかゝる事もなし。直に御用とは何事か親忠太兵衛迄もなく。直にお話遊ばせと隔てぬ挨拶まめやかなり。權三手

を突き御親切忝ん。忠太兵衛殿か。御舍弟甚平殿を以て申す筈。近頃愈忽の願ひながら。今度御祝言お振舞の御馳走。眞の臺子の飾。

市之進弟子中との仰渡し。常々市之進殿お物語一通りは聞覚え。未だ指圖繪圖の巻物。傳授口傳許し印可を受けされば。押放して

眞の臺子覺えたとは申されず。天下泰平長久の御代。斯様の事を勤めねば武士の奉公秀で難し。數年の懸望今度の大願。巻物

拜見を許されば。生々世々の御厚恩と額を疊に押下げて。師弟の禮儀見えければ。

扱も扱も御熱心御奇特な御心入れ。此の傳授は一子相傳にて我が子の外へは傳へられず。のがれぬ弟子は親子の契約あつての

上。繪圖巻物も渡す事。それにつき序が

ましい近頃粗相な。藪から棒と申さうか寝耳に水と申さうか。思召も如何なれど。折がなくと豫々心にこめし故申出して見ます。姉娘のお菊を。こな様へ進ぜたいと常々私が望み。今も今とてお噂申せし折柄。かう申せばどうやら臺子の傳授と換へくにするやうで。娘の威も落ち大事の傳授の詮もなし。それはそれ。是は是の談合で。菊を其方へ進ずれば誓は子の相傳。市之進聞かれて満足第一私が懸掣。押し出してよい女房といふには限りのない事。先づ大抵目鼻揃うた秘藏娘。添はるゝ殿御はこな様除けて外にない。なんと合點して下さんすかと。言へども恥かしげに差俯向いて返事せず。サアどうでござんすぞ。ハテナんのはが恥しい。扱は娘がお氣に入らぬの。ムウ頭振らしやんすは否でもない。エ、知れた。疾うから外に約束があるさうな。さうちやく主ある花は是非がない。あつたら男に戀がさめたと。立退けば。ア、是は

迷惑。誰とも我等約束なし。木石ならぬ若い者。當座の色は格別極めし事はゆめくなし。師匠の聲と申せば聞えもよし。娘御お菊殿。私妻にきつと申し受けませう。ハアウ忝いお嬉しい。サア望み叶うた。お侍の詞底を押すは如何ながら。媒なしの縁組證據のため。ちよつと御誓言聞きました。

御念入りは尤。再び具足を肩にかけず。市之進殿の指料に刻まれ。尻を往還に曝す法もあれと。言はせも果てずア、もう能うござんす勿體ない。今日吉日今宵蓋子の傳授の書。印可の巻物渡しましよそれお供の衆戻せよ。先づ娘には逢はせませぬ。私に似たらば定めて愔氣深からう。脇へ心散さす一筋に頼みます。悪性があつたらば此の姑が愔氣の腰押し。お持たせの名酒お前と私が此の樽に。かう手をかければ契約の盃した心。橋がなければ渡りがない。蓋子が縁の橋渡しし此の樽も橋渡し。橋にて祝ふ鶴の身も紅に染むるとも。フシ世に謡は

る、端ならん。又玄關に老女の聲。子衆ちと頼みましよ。川側伴之丞妹お雪と申す者の乳母。つひしかお目にはかゝらねど。お慮外ながら奥様へ密にお話申したさ。お雪使やら何やら押しかけて参りし由頼みますると言ひ入る。權三はつと色違へ。扱々思ひも寄らぬ奴何用あつて参つたぞ。

我等には大禁物見付けられては迷惑。どうぞ抜けて歸り度いと、フシろろく眼に成りければ。ハテ、伴之丞の侍畜生其の妹の乳母。何の氣遣侍畜生の因縁聞いて下さんせ。主ある私に執心かけ度々の狀文。夫ある身を踏付にする不義者。御用人衆迄訴へ。恥かゝせてと思ひしが侍一人廢るといひ。市之進殿歸られては生死のある事と。中使の下女に暇遣つたれば。兄の不義の使に妹の乳母が來たさうな。直に逢ふも口惜しい。留守を使うて奥から様子を立聞せう。女子ども挨拶していふ事言はせてつい往なせ。權三様をもあの婆が。見ぬやうにそつ

と抜かして往なせませ。夜に入り人も靜まつて必ずお出で。傳授の巻物渡しましよとフ言ひ捨て奥に隠れ入る。まんは氣轉才覺者。めませ領き權三を圍ふ袖屏風。うなうお乳母殿とやら。此の暑いに年寄の御太儀な。それ汗拭うて進ぜうと顔にべつたり手拭の。縮みと皺ともみ草の。どさ

くさ粉れ忍ぶ草權三はフ抜けて歸りけり。餘り拭うて顔が痛い。折角のお出に。奥様は今朝より親里へ参られ。ゆるりと逗留ある筈。何なりとも私にお語りなされと言ひければ。それなら此方頼みましよ。養ひ君のお雪様と申すと。笹の權三様と言交せの事あれども。媒酌が無うて御祝言が遅なはる。殊に此の乳母が働で一夜の枕を交させた。其の禮に權三様より雪踏一足銀一兩。是が證據。侍の妹に侍が疵付けては。退引ならぬ大事。波風立たすつい埒の明くやを添へらると。波風立たすつい埒の明くやうに。權三様と内證の跡先しやんとしめて

ある。お子様方もあるからは。鏡金出して御祈禱さへなざるゝぢやござらぬか。人の爲の善い事は山伏入らずの御祈禱。首尾よう相済み相應のお禮。そこは乳母が呑込んだ此方も骨は盗むまい。表面ばかりの取結び偏に頼み上げます。始めての長口上ホ、ホ、アウおはもじやと、フシしやべりける。是なう。其方の心に長ければ

聞く耳には猶長い。此方の奥様は。禮物取つて肝煎する奥様ちやござらぬ。殊に酉のお年で此方のやうな長鳴きが忌み事ちや。早う往んで下されと愛想なければ手持悪く。ム、ウ私は成で丁六十。狼狽へ歩いて。

地棒に當らぬ先に。長吠せずと往にまじよとオウ、逃吠。してぞ歸りける。オ奥には得手に。法界悋氣願患の怒綱切れて。鎮め兼ねたる折節。父岩木忠太兵衛。只今是へと若黨先へ告げければ。家内恐れ鎮まりて。おさゝも可笑しからねども。親に愛想

の笑ひ顔。ヲ、市之進の留守皆機嫌よろ

て満足。虎やすてめが能く遊んで。晝寢をせず睡たい。歸つて早う寝たいというて。連立つて歸つた。夜が短い。早く寝せて疾く起し晝あがかせたが萬病圓。姉は奥にか。娘の子は十三四から端近く出さぬがよい。姉やすてめはお身に似たか。虎めは市之進に生寫し。こりや。市之進江戸より歸つたというて。母が側へちやつと行けと。

孫寵愛の戯れ。ヲ、久しう遊びやつた。祖父様祖母様やかましからう。奥へいて姉と並んで寝ねしやや。乳母よ寝冷させまいぞ。やい角介。戻つたら何故石燈籠に火は點さぬ。日が暮れたが目に見えぬか。女子ども。祖父様のお慰み今の名酒をちと

上げませともてなせば。いや、名酒より何より數寄屋の庭。毎日見ても見飽かぬ。市之進の物好きが伸びて面白い。ヤ豫て内意咄した笹の權三。眞の臺子の願ひにはわせなんだか。如何にも懸望なされし故。巻物渡す約束に極めました。出来た。若

い和郎の奇特な。諸藝の心掛頼もしい。仕損じあれば市之進の誤り殿の恥辱。秘傳殘さず傳授めさ。さり乍ら家の大事譚知らぬ下々にも。一言一句聞かせまい隠密々々。更けぬ先に歸らう提灯とほせ。皆宵から休ませ夜紋に留守を言付きやれ。又明日見舞申さう。やい角介。男といふは汝一人。門背戸に氣を付け。何をいうても實で

も、角介だと。老の戲言夕闇に。フシ歸れば跡は。門の戸を。さすが數寄者の庭の面。カオクリ。若葉の木立物ふりて。路次ほの暗き燈籠の。長火かけ宿借る熊笹の露は螢か蛙の聲の喧く。萱屋が軒に音づれて。しよろく、流れ水の音。ホ、夜もしんく

と更けにけり。おさゝは縁先に家内は寝入りほつしりと。何を思ふと咎め手の無きが我が家の取得にて。涙も袖に落ち

次第。エ、思案する程妬ましい。大抵の男を可愛い娘に添はせうか。我が身が連添ふ心にて吟味に吟味。思ひ込うだ稀男なれ

ばこそ。大事の娘に添はせるもの情氣せず
に置かうか。晝の婆めが抜かし面お雪様
と權三様と内證しやんとしめてある。エ、
地腹が立つ妬ましい。情氣者とも法界者とも
も言ひたかいへ。傳授も瓢箪も何のせう。

蓋子も茶釜も絲瓜の皮。エ、恨めしい腹立
やと。身を縁柄に打付けてこぼす。涙の袖
穿絞る。茶巾の如くなり。ハアウア、

地思へば情氣も因果か病か。是程情氣深う
ては。我が男を手放して海山隔ててよう置
くぞ。能く〜お主は怖いもの苦心の氣隨
から。姑が聖の情氣とは悪名の種。さらり

と思ひ忘れうと。拂へども猶胸こがすエナ
涙は癖となりけり。契約なれば笹の權
三。供をも具せず靜かに門を叩く音。内に
も應へず走り出で誰ぢや。笹のとばかりに

明くる戸を。入るより早くはたと締め直に
數寄屋へ〜と。手燭片手に傳授の箱。二
人忍びし有様は人の疑ひあるべしと。我が
身に見えぬ障子一重。明けて數寄屋に

入りにけり。是は繪圖の巻物。祝言元服
出陣の臺子。これ御簾の中の茶の湯の圖。

誠の眞の臺子とは此の行幸の臺子の圖。
三幅對三つ具足壺飾りの品々。印可の卷許
しの卷是を讀めば口傳入らず。心靜かにゆ

る〜とお讀みなされませ。權三頂き繰返
し。讀めば世間も鎮まりて。蛙の聲も
更け渡る。折しも川側伴之丞四斗入の明
樽下人に持たせ。市之進が屋敷舞のめぐり

うそ〜耳を翫て小聲に成り。ヤイ波介。
内にはよう寝たぞ。おさむが寢間へ忍び込
み。口説き畢せ積る念を晴し。色の上にて
たらし込み。眞の臺子傳授の巻物してやり。

權三めにうつそりさせう。若し人が起き
合うても女小者。口へ砂でも頬張らせいき
ぼねをあげさすな。それ鏡突抜けまつかせ
と。踏付くれば底も鏡もすつぼりと抜けた

るを。枳殼垣にぐんぐつと。端山繁山しげ
けれど茨障らず思ひ入る。抜穴道とぞ成
つてけり。汝は四方見合せ跡から來いと

伴之丞。そり〜と這ひ潜り。庭に出づ
れば數寄屋の内に燈火の。影は障子に男と
女忍び逢ふ夜のさゝめ言。領きあうて顔と

顔寄せてしつぼり濡の露。寝て仕舞うたか
未だ寢ぬか。しみ〜甘い花盛。伴之丞も
氣は上づり。裾はお留守を念がけて。先陣

越された宇治川に。膝ぶり〜の流れ武者
咽を渴かし立ちけるが。權三が聲にて。
ハア誰ぞ庭へ來たさうな。ハテ晝さへ來ぬ

所夜更けて誰が來るものぞ。イ、ヤ。今迄
鳴いた蛙がひつしやりと鳴き止んだ。ア、
蛙も少し休まいでは。きよろ〜せずと先

づ巻物ども讀ましやんせ。あれ又蛙が鳴
きますと。いふ中に波介樽を潜つて庭の内
主従一所に立休らふ。あれ又ひつし

やり鳴止んだ。どうでも誰ぞ在るは定。
ちよつと吟味と刀追つ取り出でんとすはや
らぬ。三方は高塀北は茨垣。犬猫も潜ら
ぬに人の來る筈がない。獨しての氣遣ひ扱
はお前と私。かうしてゐるを妬む女子が。

喚きに來る其の覺えがござんすの。是は迷惑左様の覺え微塵もない。いやあるいやある。媒が口を添へればつい埒の明く様に。

内證しやんとしめてある。エ、くくく女身の果敢さは。表面ばかりに目がくれて。胸の中を知らなんだとわつとばかりの。

腹立涙は是宵からくく燃え返るを。姑が聲の惰氣と浮名がいやさに笑顔作つて。堪へ袋ふつりと緒が切れた。是見よがしの其の帯は定紋の三つ引と裏菊と。小

じたるい引ん並べ誰が縫うた。誰がやつた。嘯み斷つて退けうと飛びかゝり武者振り付く。ハテ此の帯には様子があつた。フ、

様子が無うては。様子といふが妬ましい互に泣くやら叩くやら。帯ぐるぐると引つ

解き疊かけて擲り。打ちエ、嫌らし手が穢れたと。手繰つて庭にひらりと投げ。拾へといはぬばかりなる。思ひの闇ぞ詮方なき。

二人の影はばら／＼髪如何にしても此の態。帯解いても居られずと庭に出でんとす

る所を。ア、くく帯に名残惜しいか。不承ながら此の帯なされ。一念の蛇と成つて腰に巻付き離れぬと引つ解いて投出す。權三餘りにむつとして二重廻りの女帯。致

した事御座らぬと。同じく庭に投出す。すかさず拾ひ伴之丞聲を立て。市之進女房笹野權三不義の密通敷寄屋の床入。二人が

帯を證據。岩木忠太兵衛に知らすと言ひ捨て抜けて出づる聲。南無三寶件之丞弓

矢八幡通さじと。刀引ん抜き障子蹴破り飛んで出で。燈籠の火の影うすく。探し廻れば波介が狼狽へ廻るをしつかと捉へ。伴

之丞は何とした。私を捨てて出られた。エせめて汝を冥途の供と。肝の束をぐいぐいぐ。扱ればぎやつとばかりにて。二

刀にぞ止りける。直に逆手に取直し左手の小脇に突つ込む所を。おさむ縫つてこ

りやどうぞ。不義者は伴之丞。身に曇りないお前が何の誤り死なうとは。ア、愚かな。二人が帯を證據に取られ。寝亂髪の此

の態。誰に何と言譯せん。もう侍が廢つた此方も人畜の身となつた。エ、くく無念やと泣きければ。扱はお前も私も人間外れの畜生に成つたか。如何なる佛罰三寶

の冥加には盡果てた。あまましい身に成り果てたか。はあつとばかりにどうと伏し消

え入る。様に歎きしが。エ、是非もない。最早や此の二人は生きても死んでも廢つた

身。東に御座る市之進殿女房を盜まれたと。後指を指れては。御奉公は愚か。人に面は

合されまい。とても死ぬべき命なり只今二人が間男と。いふ不義者に成り極めて。市之進に討たれて男の一分。立てて進げて

下されたら。なう忝なからうと。又伏し沈むばかりなり。いや是不義者にならず此の儘で討たれても。市之進殿の一分立て。

死後に我々曇りない名を奪げば。二人共に一分立つ。如何にしても間男に成り極るは口惜しい。フ、いとしや口惜しいは尤なれど。跡に我々名を清めては。市之進は

女敵を討誤り。二度の恥といふもの。

承ながら今爰で女房ぢや夫ぢやと。一言い

うて下され思はぬ難に名を流し。命を果す

お前もいとしいはいとしいが。三人の子を

なした。廿年の馴染には。わしや換へぬぞ

と。フシわつとばかり歎き。フシくづをれ見

えければ。権三も無念の男泣き。五臟六

腑を吐出し。鐵の熱湯が。咽を通る苦しみ

より主のある女房を。我が女房といふ苦患

百倍千倍無念ながら。かう成り下つた武運

のつき是非がない。権三が女房。お前は

夫。エ、くくく。いまいくしいと縋り合

ひ。フシ泣くより。外の事ぞなき。サア。地家

内の目の醒めぬ中夜も短し。はや立退か

と引つ立つれば。可可愛や三人の子供が。

母が今此の態で。住馴れた屋敷を退くとも

知らず。何事か夢に見てすや。寝入る

寝顔に。暇乞を泣きければ。エ、地未練

な市之進に首尾よう討たるゝより。浮世の

顔ひ何があると。引立て門を明けんとすれ

ば。門外に提灯人足扉ぐわたく。大音あげ。

岩木甚平。笹野権三に逢ひに來た。誰も臥

さつてけつかるか明けよ。と呼ばはつた

り。ハア、悲しや弟の甚平門からは出ら

れぬ。裏門はなし扉高し飛んづ押しつうろ

つく間に。家内は起きる門は叩く前後に口

をつく茨垣。ヤア悪人めが抜穴我が身に神

の御利生と。二人手を組む生死の眷命の境

四斗樽に。六道四生きつと詰つて動かれず。

跡へも先へも酒樽と。共に逆様さかどんぶ

りころく。頃は曉の。時は夜明の七つ頭。

二つ頭に足四本。胴は一つの酒樽にあ。ゆ

む無明の酒の酔。是ぞ冥途に通ひ樽。契り

は借老同穴と一つ棺に一つ穴。どこぞに埋

んで桶の輪かと言はねど。物がいはせたる。

権三おさむ道行 下巻

杖の権三は伊達者でござる。油壺から出

す様な男。しんとんとろりと見とれる

男。どうでも権三は好い男。花の枝からこ

ぼれる男。しんとんとろりと見とれる男。

フシとしい男。ハルフシ戀ひ慕はれし。二挺

の弓の本弭の放さぬ先に弦断れて。引かれ

ぬ方に引かれ行くオクリ一人。留守腰の床

の内。心も澄みて目も冴えて。辛氣々々の

空格氣。つひに我が身の。フシあだし草。世

の誹り草。浮草に。淺香の水の漏れそめて

オクリ笹野の。露と置きまどひ寢まどひ歩み

まどひては。故郷忘れぬ。オクリ二人が涙。湧

きて出石の山はあれどオクリ戀の。病は驗な

き。但馬の湯拵敷ふれば。我とそもじ

は五つと七つ十二違ひの月更けて姉とも言

は。岩枕。交す枕が思はくも。影はづがし

や。フシ野邊の草。其方は人の女郎花。

俺が口から女房とは。身の恥極いたづらに。

染めぬ浮名の村萩の亂れ。泣くこそ哀れな

れ。ふり上げ見れば源の。鬼神退治の大江

山峯は青葉に包まれて。谷も尾上も。

しんく。と山の。振さへ愛想なくすみ切

りたる。松の下蔭。藪の小蔭の一在所。

あれく。蕎麥搗く隣等の姉か。三

十ばかりで齒黒振袖それでも戀の一節や。

大工どのよりナウ。かちやが憎い。閨

の掛金鍛冶がうつシヨంగాへ。なう鍛冶が

うつ。閨の掛金鍛冶がうつシヨంగాへ。な

う掛金の。關の鎖の。解けそめて。迷ひ

そめしは誰ゆゑぞ。若い殿御を我ゆゑに。

くづをれ姿二腰のその一腰は道芝の露の。

價と消え果てて。一本薄刈り残す。腰の廻

りは秋の暮。さびしや悲しいとほしと。フシ

抱き合ひては泣くばかり。ハムシ國に親と

子。東に夫思ひは千筋百筋の。我は涙の麻

梓繰る。ハムシ眞字を繰るとや。世の噂手

でせきかぬる。フシ川水に。洗ふ帷子播磨

濁。ろくに寝ぬ夜の目もとぼくくと。小ナラ

埃。まぶれの髪かたち。鹽焼く浦の海士に

も劣る。山田島の。鳥威しさりととは鳥威

し。粟の鶉や澤田の田鶴。ひよくと。鳴

くは鴨。小池に棲むは鶯。鶯の。しか

も爛の夫の。留守もり。男媒の愛

涙の種ぞかし。跡にゆふ立つむら。雲
にさつと吹き来る。風の音野邊の。薄のそ
よぎ迄。我を追來る追手かと。露の笹原
ヤツトン。連立ち走る踏分け走る。磯
の千鳥をぼつかけて。石突掴んでずん
ずと伸しやる。サアゑいさつさ。ゑいさ
ゑいさゑい。笹葉の槍の槍先に。ハムシ
外す小鳥も。無かりしに今は羽風も恐ろし
く。舟は乗合人目せく徒歩路。急げどはか
行かず。何をしるべに難波津の名は住吉も
住みうしと。世の憂きふしの伏見山。キ
染めぬ袂も捨つる身は。心ばかりを墨染の里
に。忍びて。送りける。

胸痛みいと枕も上らぬに。なんちや道
具が戻つた。孫とも縁切れたか情
なやとよるぼひ出で。なう聞か事も見ん事
も悲しい事ばつかりと。葛籠にかつばと抱
き付き。絶え入るばかりに見えけるが。
如何なる天魔の障。此のやうな事仕
出す。さもししい氣は微塵もなく。眞正者の
孝行者子も尋常に育てて。か。様聞いて
下され私は娘もたんと持つ。嫁入の時の諸
道具を一色も散さず。子供躰ける便に。小
身の我が夫に餘り苦にかけともないと。い
ふ詞が違ふにこそ。廿年になる道具古び
もせず持ちなす此の心で。そもや悪事をな
んのせう。物の魅入か報いかと。又口説
き立て泣きけるが。市之進の身に成つては
口惜しい筈なれど。餘りにこれはつれない
子供に譲つてくれもせず。見苦しい門に積
ませて我が子の恥は思はずか。ヤイ中間
ども下女どもも餘り人の見ぬ中。はやは
や内へ運んでくれと。歎きあせれば忠太兵

衛。これ〜お婆。聞いてゐればぐどぐどと何をくにも立たぬ事。市之進には誤

無い男一所に討つて棄てる。女の諸道具市之進が留めて何にせう。人間外れの女穢れ

し道具武士の家が穢る。中間ども片端に叩き割り火をつけて焼いて了へ。長つた

と棒さい槌鋤鉞提げ〜立ちかゝる。母は堪へ兼ね手を廣げ待つてくれ〜。な

う祖父様道具惜しうはないけれども。今生でも來世でもおさゝが顔はもう見られぬ。

手に觸れた道具せめて一色は老の形見に残したし。屋敷を駈落する時も唐高麗に居るとても。さぞ忘れぬは子供が事常々やり

度いやり度いと。思ひし念も、フシ不便なり。一色づつも残して子供に取らせて下され

と。葛籠引寄せ箆筒に縫り、悶え悲しみ泣きければ。これお婆。今是が悲しいと

は。お身も我もま一度大きな悲しみ聞かねばならぬ。其の時二人は何とせう。年寄

つては憂き事を聞くが役と覺悟して。ちつ

と涙を堪忍めさ。身も堪忍々々と一途に堅

き國武士の、咽に涙ぞつまりける。何と思案して見ても此の道具受取つては。傍

輩中の思はく他國の聞え。若黨中間ども煙高いは憚り。一色づつ取分け焼いて棄て

と言ひ付けられ。迷惑ながら主命葛籠箆筒挾箱引散らし打碎き。海士の焚火と燃

え上り。煙に見えぬ佛に母は猶も身を悶え。可愛やおさゝが嫁入の時。まあ爰で門

火を焚き。千秋萬歳と祝ひし其の道具。門火の跡で灰となす母が身體諸共に。薪とな

してくれぬかと。歎を見ては下女下婢。若黨小者に、至る迄皆々袖をぞ絞りける。

残つたは長持一つ取分けて燃せと。聞く二人の孫娘姉妹抱合ひ。泣きゐたり。祖

父も祖母も夢心地やれ〜危なや命冥加な孫どもや。若し火を付けたらよいものか。

堅い父御の言ひ付けか何故に聲を立てなんだ。器用に生れ付いたよな。花紅葉のやう

な子供を。母めはようも見捨てたと變かき。

撫でて泣きければ。おすては何の頭是な

く母様に逢ひ度い。母様呼うでと泣くばかり。姉のお菊はおとなしく。父様は母様

を斬りに行くと仰しやる。祖父様祖母様頼みます。代りに私を殺して母様助けて下

されと。父様に訛言をと、膝に凭れ伏しければ。マ、よう言うた母はさ程に思ふ

まい。虎次郎はなぜ越されぬ。娘を母に付けるは離別の作法。ここに隔ての心はない。

孫三人を朝夕に見たらば憂さも紛れうもの。此の子は父御の四十二の二つ子にて母

がお捨て付けたが。今は父母兄弟が世の捨者に成つたかと。口説き練言身も萎れ。枯

木のやうなる祖父の顔。涙に分ちなかりけり。泣くなく、大事な。なんぼ母めが

捨てても祖父や婆が可愛がる。甚平といふ叔父がある。サア来い〜と手を引いて。

泣く〜奥にぞ入りにける。茶筌髪。いひがひもなき身なれども。武道を磨

く。たぎる心は運次第。浅香市之進歸

國を直に門出と。三人の子を片付けて

氣は廣けれど。先づ暫し。フシお國の内は

憚りの。笠深々と舅の門。今迄とは事變り

案内なしも無禮なり。物もうも角だつ。暇

乞一禮のつてもがたと玄關見入り立つたる

所に。男忠太兵衛瘦骨高く引つ蹙げ。鍋の

鉦程反りに反つたる朱鞘ぼつ込み。一文字

に駈出づる。ア、申しくと袖引留め笠取

つて捨てければ。イヤ市之進今朝は畜生

めが諸道具。孫娘二人受取り申した。放出

立は暇乞と見えた。お出過分。追付け吉左

右待ち申すと言ひ捨てて駈出づるいや申

し。御顔色も常ならず氣遣千萬。巨細承

り届くる迄は慮外ながら放しませぬ。なう

市之進御自分江戸より下着の節。娘さるめ

が提首をお目にかけいで口惜しい。悴甚平

は其の日より尋ねに出る。年寄つても忠太

兵衛腰膝立たぬ身ではなし。刀の刃に血も

付けず高枕でも暮されず。一人物にも狂は

れず。相手がたと存するに。最初不義の證

據を取つて我等にも知らせ。國中に沙汰を
した事觸れば川側伴之丞。地彼奴を斬つて
老後の思ひ出お放しやれと駈出づる。ア、
これく。御心外尤乍ら御老人の腕先。

萬一件之丞に討たれさつしやれば。此の市
之進先づ女敵を差措き。舅の敵を討たねば

叶はず。取交ぜ迷惑は拙者一人平にく御
料簡。御厚恩に受けますると差俯向けば

なうこれ市之進。斯程根性の腐つた女房
の親でも。忠太兵衛が討たれば舅の敵を

討つ氣よな。是は曲もないお尋ね。たとへ
女は畜類に成りたりとも。舅は舅に極つた

忠太兵衛殿。敵があらば討たいでは。そり
やお尋ねに及ばぬ事。市之進ア、御心底

身に餘り忝いと。大地にどうと老體の跪
きたる感涙に。市之進も是はと手を束ね。

涙にくれし掣舅。武家の道こそ正しけれ。
サアく。婆にも逢うて暇乞の盃。兄弟の娘

ま一度顔も見たからう。草鞋がけの體態
と奥へは申さぬ。やい。市之進のお出

で皆来いやいと呼ばはれば。ヤ申し少い奴
らによく申し付けたが何と吠えは致さぬか
な。イヤく器用者ども。地そこは氣遣ひ
めさるなど。フシ玄關に坐しければ。フシ母

は二人の。孫娘。左右に具して立出づる。
長中。中。に盃酒香盆正月の節振舞。三人の子の
誕生日一家寄合ふ祝ひ日の。座敷は座敷に
變らねど。揃はぬ者は人の數。五人顔を見

合せて物をば言はぬ目禮に。涙嗜む顔付は
泣叫ぶより哀にて。酌取る下女が袂迄。精
こぼさぬ酒に絞りけり。母は涙の堪へ精

盡き果ててわつと泣き。可愛や此の子供が
父御の言付覚えてか。目に涙は持ちながら
おとなしいを見るにつけ。あの業人の畜

生の人でなしの腹から。此のやうな器用な
子を何として生み出した。人並の根性さげ
てくれたらば。母も子も揃うたれ。忠太

兵衛夫婦は子も孫も生み揃へた。手柄者と
いはせぬか。娘の子は母方づきと二人ば
かり送つて。虎を残して下さるは。地岩木

190

子稚重三権の鑑

の苗字を疎みこちとは縁を切る心か。曲もない市之進恨みにござると聲をあげ積る。涙を一言に泣き盡く。すこそ道理なれ。イヤ／＼お恨みは相違隔つる心聊かなし。此の度我等お暇下され。世の散人となりたれども親より傳へ今日迄樂みと致せし茶の道は忘れ難く。虎次郎めを千野休齋弟子分に預け申したり。お恨み晴れられ門出のお盃をと言ひければ。尤さこそと打解けて。隔てず交す盃に。いふ事としては首尾よく追付け本望々々。その本望とは子供の母我が妻を斬る事を身の悦になす事は。如何なる運如何なる時如何なる悪世の契ぞと。思へばはつたと胸塞がり。鐵石の如くなる市之進が心かきくれて。覺えず涙に咽びけり。女房おさるが弟岩木甚平宿なし旅の形も驚れ一僕具して立歸る忠太兵衛伸上り。イヤ／＼甚平戻つたか。首尾はどうぢや市之進も只今門出。なんと／＼とすく／＼立ち。ヤア市之進。留守の中不慮の事出来

お歸らない先不義者どもが提首。此方へ見せ申せと親どもの心せき。我等は元より彼奴等が駈落の曉より。直にぶつ立ち食物を腰に引つ付け。海道筋の旅籠屋馬次舟場を穿鑿し。山蔭在々迄も近郷残らず尋ねしが。いや／＼足弱を連れ氣の後れたる迷ひ者。深く隠るゝ心も付くまいと存じ。伯耆路へかゝつて詮議致せども出逢はず。つく／＼存ずれば相番を頼みし迄にて番頭へも断らず。日敷を経るは不調法と存じ。引返し只今歸りがけ直に斷り相濟み。ちよつと立ちながら兩親に逢はんため此の仕合。御自分も我等も互に遅いか早いかで。御目にかからずば残念たるべし。幸の折に参り合ふ本望達せん吉左右。いざ御同道。仕らんとぞ勇みける。市之進手を打ち扱々御苦勞御背折。御親子の御懇意心肝に徹し忝し。最早是より御同道には及ばず。我等一人参るからは外を頼む事もなし。甚平殿は御休息頼み入るといひければ。いやさいはれぬ遠慮。心は彌猛に存しても人数なければ手の廻らぬ事もあり。扱こそ留守の内。よもや何事もあるまいと落付いても斯様の事の出来。權三も他國に親類知音もあるべし。何と構へ置くも知らず。三日路四日路とも踏出し。時の變にて助太刀欲しい事もあるべし。是非ともに御同道。イヤこれ御心底頼もしけれど。女房の弟に助太刀させ女敵討つては本望でもあるまいか。否さ助太刀と極めずとも。只力になる迄の事と聲高になりければ市之進色を損じ。扱は茶入釜の蓋取るより外。人の首の取り様知るまいと思召すな。弓矢八幡身こそ少身なれ。見事ちぎれ具足の一領も用意して。すはといはば刃金を鳴らすお歴々にも負ける事はおりにないさ。甚平から／＼と笑ひア、腹筋な。然らば足許の女敵なぞ討たぬ。ムウ足許の女敵とは。ム、ウ川側伴之丞が事な。それ程覚えのある女敵なぞ討たぬ。市之進はつと驚き尤彼が不義の狀。數通女が

手箱にて見付け。彼奴も一刀と思へども一時には手に及ばず。先づ是は後日の沙汰と言はせもあへずそれ／＼。鼻の先に置きながら二人の敵は手が届かず。初日の敵後日の敵といふ分ちは知らず。助太刀頼まぬといふ市之進の女敵一人は。岩木甚平が助太刀討つたお見やれと。腰兵糧の器物引つちぎり。押開けば伴之丞が首。洗ひ立てゝぞ持つたりける。市之進ははと手を打てば男夫婦大きに悦び。金輪際の敵憎しといふは彼奴が事。但し御扶持人上へは何と訴へた。いや訴へるに及ばず彼も身の蜂拂ひかね。お暇申し捨て駈落致す所を。因州境にて思ひの儘に討取りました。手柄々々なう市之進。敵討の門出に是程の吉左右あるべきか。忠太兵衛が指圖甚平を連れられい。尤いふに及ばぬ事助太刀して本討手の名に疵つけな。畏つたお暇と立出でんとする所に。十ばかりなる旅人の門柱に隠れ。奥を覗いてちらめくを。市之

進きつと見やり心得ずと走り出づれば。息子の虎次郎飄々しげなる旅装束。汝の態は何處へ行く心入れ。小癩者めと小腕取つて引出す。イヤと、様の供して行く。姉様おすては女子なり。私は男敵討つ親を一人やるは武士でない。我先に立つて走り出づるを引止め。扱は汝を生んだ母親を斬る心か。かゝ様なんの斬るものぞ。かか様を連れていた權三めを切つてくれる。かどうでも行くと意地張つたり。いや悪い合點。叔父様も父様も出て行けば。祖父様祖母様御年寄姉やすては女郎の子。そちを後に残すは若し權三めが来た時。斬らせうと思ふ用心。随分休齋に茶の湯を習ひ。時々これ／＼お見舞申し。お二人へ孝行兄弟どもに氣を付け。權三めが来たらば切つて捨てい但し一人残るが怖くば。連れて行かんと宥めたらせば。如何にも一人残りましたよ。跡の事氣遣せず。必ず手柄遊ばせと聞分けのよき利發者。男夫婦は目もく

れて女子男打揃ひ。すぐつたやうな子供の成人。見たい心もなき母めは如何なる畜生ぞや。不便とも思はぬ。斬るなりとも突きなりともやがて本望々々と。スエナ涙ながらのッし暇乞ひ。兄弟三人聲々に。權三めは斬殺し。母様は息災で連れて戻つて下されさらば。／＼とつ様と言へども父はさらばとも。言はんとすれば目もくれて胸に。八色の雲閉づる故郷。離れて三夏別れ行く。ハルツ月に誰。寝て見よとてや伏見とは。船に寄せたる里の名の。橋の夕暮来て見れば。ホシ涼しくの文字かたどりて。京を持ちたる京橋に。一ツ流れの御鞍川末吹く風も。フシ袂涼しき。權三おさむは。三日とも。同じ所に足止めて。長地ゐるにわられぬ梓弓伏見に暫し墨染の秋の櫻か入相も。明日をば知らず一日の命。命と聞き捨てて。スエナ難波の方に思ひ立ち。人目を忍ぶ乗合に。空居睡の船漕げば。側に茶船を漕ぎつ

れて温鈍蕎麥切。フシきりム〜と押廻し。

豆腐茶良茶と茶を賣るも。宇治の川水着

ち添ひて。昔を胸に涙ぐむ。フシ女。心ぞ

哀れなる。市之進は御幸の宮甚平は三柄

の里。毎日そんじようそこ〜と。相圖を

しめて甚平一人。京橋の夕日影船どもを見

廻し。早ずんど早う出る船があらば。乗

り度いと。乗手に目をつけ見廻せば。早

いが好きなら此の船。初夜が鳴ると出しま

す。おういから狭さうな。狭い事は御座ら

ぬ。若い旦那殿とおか様と舌の蔭に屈んで

ぢや。あの側が廣いあそこに置きませう。

イヤ居所はどうなりとしてるようが。初夜

というてはもう遅い。明日の豊船に致さう。

そんなら勝手。船はこつちの。乗る身はそ

つちの。強ひはせぬといふ中に船中とつ

くと見廻し。顔は見えねど十が十是に極つ

たと。嬉しさ足も飛上れど。苦の蔭より見

付くるかと。態とゆる〜桶の上。涼む顔

して二三遍心祝ひの神の闌。市之進が旅宿

へとフシ足を飛ばせて走りける。苦押除

けて。ハツア大事の物忘れたコレ船頭殿。

こち二人は上げて貰を。人に頼まれた大事

の買物銀まで受取り。乗急ぎするととん

と忘れた上げてたもれ。してそれは何處迄

買ひに行かつしやる。ヲ、あれは。何とやら

いふ町ぢや。ヲ、それ〜。撞木町のあ

ちら。藤の森の先ぢや。ハア此方も餘程の

事いうたがよい。爰からなんぼあると思は

しやる一里半ござる。其の中に舟は出てし

まふ。上げる事は成りませぬと。情も。

なげに取合はず。イヤ遅くば構はずとも

出してたもれ。二人分の運賃は拂うて上

る。平に頼むと北南の見世先。桶の上に目

を放さず。爰な旦那殿はうろ〜と詰ら

ぬ事をいふ人ぢや。乗せもせぬ運賃取つて

は一分立たぬ。矢張り乗りてござれ。それ

は惨い船頭殿。今のやうに跡から乗手もあ

れば狭うなる。平に上げて下され頼みます

ると詫びければ。狭い事氣遣ひして下され

な。明日の朝大阪迄。満足に届けりやよい。

地今宵一夜はおか様も胸切にして。旦那殿

もこま〜に刻んで片付けて乗せまする。

そこらは構はずふんぞつて。のたれてござ

れといふ事も。フシ心にかゝる一つなり。

地おさる萬氣にかゝり。ナウ船頭殿。物に

は情といふ事あり。人を乗せず運賃取れば

船頭の一分立たぬとや。我々とても人に銀

をことづかり。その買物を渡さねばどうも

一分立ち難い。これ手を合する。是非と

も上げて下されと詞をつくせば聞分けて。

地そんなら早う上つた。ア、地過分々々と

二人手を引き氣もせく足許。此方衆は怪

我しさうな。雁木に躓き。おか様の大疵に

又。疵の付かぬやうに。用心々々と。常船

頭の戯言も。今日こそ胸に應へけれ。地

床の蔭に身を潜め。甚平が爰にあるから

は。市之進も此の邊に居らゝは必定。サ

ア〜。二人の望叶うた覺悟あれと言ひけ

れば。地ア、それは覺悟の前。國を出づる

の。鼠を搜す眼まなこの光。橋には死骸のたを打つ。折しも七月中旬血は流れて滔々と。月こそ浮べ伏見川フシ立田の川とぞ紛うたる。甚平姉を引つ立て来れば。■エ、助太刀のまなこ其方に討たるは口惜しい。夫の手にかけくれまいか。や市之進程の仁。誰たが助太刀を討つものぞと橋の中へ突出せば。なう懐しやと寄る所を片手なぐりに腰のつがひくわらりすと切下げられ。フシあつとばかりに臥したりける。帯ひつ掴んで面引上げ。見れば子供の不便さと憎しにくくの恨みの涙。胸に浮むを打拂ひすんど切下げ取つて引つ伏せ。肝先踏まへぐつと刺いたる我が切先。右の踵かかとを蹴おかけすつばと切れども覺えばこそ。直すに男が胸板踏まへツメ止めはいづれも一刀。鎧の權三みんぞうが古身の鎧。疵も古疵話も古し。歌も昔の古歌なれど谷の。笹原一夜さ話。キン其の鎧の柄えも永き世の御評判。とぞ成りにける。

七行大字直之正本とあざむく類板世にありといへども又うつしなる故節章の長短墨譜ぼくふの甲乙かへつ上下あやまり甚すくならず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かる

べし全く予が直之正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺ただせよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

大阪高麗橋堂丁目

竹 本 筑 後 掾
 正本屋 山本九右衛門 版
 (板印) 竹 本 筑 後 掾
 教 博

山本九右衛門 版 印

